

芦川智編／芦川智・金子友美・鶴田佳子・
高木亜紀子著

『世界の広場への旅 もうひとつの広場論』

大澤 良 二

初めてこの本に接したときに、これはどのような読者を想定して書かれた本なのかと不思議に思ったものであった。広場への旅という言葉からは旅をする読者を想定して設定しているのかと思いつ中を見ても都市の広場の鳥瞰的なスケッチが主体となったものとなっている。都市の中の広場空間を上から見たスケッチで判りやすさという点で表現を工夫しているのであり、それが読みやすさにつながっている。また、鳥瞰的に捉えにくいものについては、広場のシーンを示す等のアレンジもあり、広場の特性に合わせて表現をかえている点にも、作者の意図が伺える。そのような構成が本を読み進むにつれて納得が出来るものとなっている。しかし、単に広場の見て歩きをする旅行者のための本ではなさそうである事は、本のサブタイトルからも察せられる。

目次構成は、1 広場への導入、2 建物のため



2017年6月10日発行
彰国社
A5横判 180頁
定価 本体 2500円＋税

の広場と人のための広場、3 マルクトと称する広場形態、4 スペイン特有のマヨール広場、5 イスラーム都市旧市街の広場概念、6 スイスのツェーリンゲン家の都市づくり、7 イギリスの広場概念、8 スロバキアの街路型広場、9 各地の街路型広場、10 わが国の広場概念、11 バリ島の広場概念、12 特殊地形・坂・段差・階段、13 ネパール、チベット（西藏）の広場概念、14 祭りとの広場、15 開かれた広場・閉じられた広場、16 水面と広場、17 転用された広場、18 連携された広場、19 もうひとつの広場論となり、その記述は世界各地に及び、それぞれの広場概念を地域、風土、歴史状況からひもといている。

表面的には、観光を目的とする旅行者にとって有用な書籍という形を取っているが、その裏で独特な広場論を展開していることを見逃してはいけない。それは最後の章に示されている。そして知

らず知らずのうちに彼の論理に引き込まれていき、広場論に行き着いてしまうのである。巧みな論の進め方に引き込まれて、いつの間にか彼の論点に行き着いてしまうことが、この本のもうひとつの魅力となっている。

大学卒業時点では芦川智氏も小生も建築設計を同じように目指していた。彼の場合は大学に所属することを目指し、私は設計事務所を起こすことを目標としていた。空間認識を如何に表現していくかという点で、目指すところは同じではあるが、進み方は異なっていた。彼は大学での研究を通して空間形態の類型化を表現することに30有余年をかけて、対象として主要な部分を都市広場の造形のあり方に求めていった。その成果がこの1冊の書籍として作りあげられていったと認識している。表現された都市広場の造形は69事例の都市であるが、そのバックには一千点を越えるデータが用意されていたことが最初に示されている。それこそが、都市の広場を対象としてたどってきた彼の研究に対する態度として伺える点である。

我が国には広場の伝統が無いと一般的に言われていることであるが、彼は、この定説に対するアンチテーゼを提案することを目的としていたのだ

はないかと私は思っている。論理の進め方は、広場概念とは多様な内容を包括できるものであり、ヨーロッパ的な都市の広場から、日本的な向こう三軒両隣のな境界空間まで、その空間規模とそこで行われている活動の内容により、ランク分けが可能であるとし、空間軸・人間軸という2軸によって類型を規定し、最終章の広場概念類型モデルの提案へと導入している。特にその中でも街路型広場について我が国と類似した形態を示しているイギリスや、スイスの事例を引き合いに出して定義づけている点に特質がある。19の章立ての内容をたどっていくうちに、いつの間にか彼の広場論の論理にひきこまれていくのである。

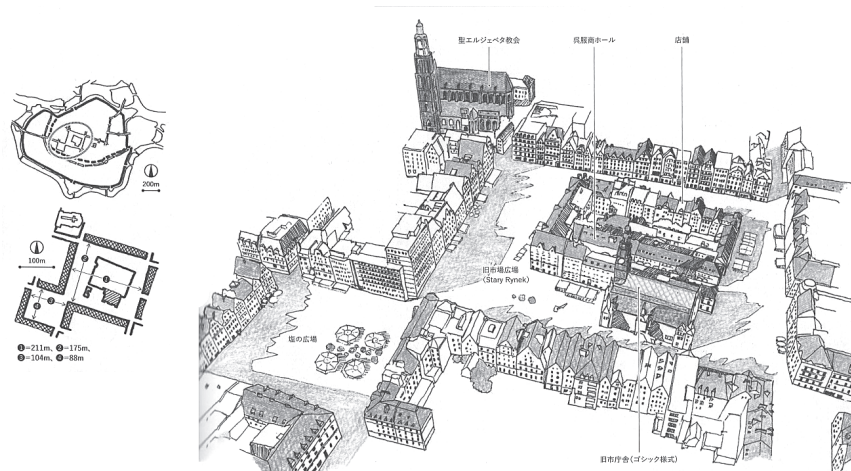
全ページに使用されているイラストが、それぞれの広場形態の特徴を捉えて表現されており、都市広場の形態を適切に表現することとなり、広場論についての有効な力を与えてくれるのである。そして、もちろん各都市の歴史的な成り立ちや特徴を短いコメントで示している点も豆知識として役立つものとなっている。ソフトな色使いのイラストが、この本のもうひとつの魅力を高めており、出来れば全ページをカラーイラストで埋めてほしいだったのであるが、そこは出版の条件があって、なかなか許されないということなのであろう。

大学の研究室で継続的な研究活動として行って

きた成果としてこの本があるとしたら、この研究に参加し、海外調査を実施してきた教職員や学部学生、大学院学生たちの活動に役立ってきたことが想像できる。後書きに示されているように四半世紀に及ぶ研究活動の内容を、大学の紀要や学会誌などに継続的に発表してきた経緯が見て取れ、1冊の本のバックに膨大な内容の資料があることも忘れてはいけない。

いつとき、昔の手法となったフィールド調査を駆使して広場空間を表現していったことは、この本のもうひとつの価値であろう。例えば、広場の大きさを感覚的に捉えるのではなく、距離という物的な物さしで示してあることは、世の計画者にとってはきわめて有効な内容を提供してくれるものである。そして方位が書き込まれた広場図面と都市図も添えられており、広場を把握していくための基礎条件として有効である。また、広場の平面形態と描かれたイラストの方位を一致させて表現している点は編集者の努力の賜となっていると思っている。

いずれにせよこの本を読み進んでいくと、広場概念の多様さを再認識させられながら、世界各地の広場に接することができ、旅行者としての体験にもつながるが、一方で、都市空間の計画者に役立つ内容ともなっていることも確かである。



ヴロツワフ（ポーランド）のイラスト（18-19 頁より）

（おおさわ りょうじ 株式会社エステック計画研究所代表・元東京造形大学講師）